



各町の凧印、屋台、法被が
ひと目でわかる!
**参加全
174か町一覧**

「凧印」とは凧に描かれた文字や図柄などの印のこと。各町ごとに印があり、そのいわれは町名に由来するものや町内の団結を強めるものが中心となっています。

また、重層、唐破風（からはふ）、入母屋造りと、豪華でまばゆいばかりの「御殿屋台」彫刻の題材も子どもの健やかな成長を願うものや縁起ものなど様々で、各町の思いが伝わってくるようです。

「法被」のデザインは凧印と同じか、アレンジしたものが主流ですが、中には全く別のものなど、町によって多様な個性が見られます。

※■ 屋台の種類 ■ 彫刻の種類 下段は凧印の説明文



時の引間城主飯尾農前守の長男、義廣公の誕生を祝い、入野村住人の佐橋甚五郎の発案でその御名を大凧に配し、城中高く揚げたことに由来。



a 重層唐破風入母屋造り
b 水鳥、七福神、金太郎



a 唐破風軒搦入母屋造り
b まわりは干支、正面は昇り竜、下り竜



a 重層唐破風
b 昇り竜、下り竜の一刀彫



a 一層大唐破風総桧造り
b 本舞台
c 絵は源氏物語と屋台守護の竜、虎、唐獅子



a 唐破風軒搦入母屋造り
b 唐獅子車、竜巻



玉西南北町



a 唐破風軒搦入母屋造り
b 雷神、風神



a 唐破風軒搦入母屋造り
b 雷神、風神



町名に表されているように、町内には今も松が植えてある家が多く、町のシンボルでもあった。平成2年に復活参加する時も、この「三蓋松(さんがいまつ)」を凧印に採用した。

泉の周辺が錢取であったことから、昔の錢印である一文錢を凧印にし、町名の「泉」の文字を配した図柄としている。

有玉連の凧印「有」は有玉神社と関わりがあり、由緒ある有玉神社の「有」の字を頂き、有玉連の凧印とした。

昭和61年に初参加。それ以前にも、この周辺地域では大凧揚げの習慣があり、その凧印に用いられたのが「葵」の文字だったことから、同様の「葵」の力強い文字の凧となった。



a 大唐破風重層造り
b 金太郎、七福神(十二支)巻竜、浜と松



戰前より、片仮名の「ウ」を凧印にまつりに参加していたが、「瓜」の感じを出すために凧印は、「ウ」から平仮名の「う」に変わった。

「わつなぎ」印と呼び、輪は「人の和に通じて町民仲良くするもの」であり、つながった輪の両端が切ってあるのは限りなく続く意を示す。



a 桃山式二層唐破風出組み造り
b 日本昔話の彫刻



a 桃山式二層唐破風出組み造り
b 日本昔話の彫刻



えのしまちょう
江之島町



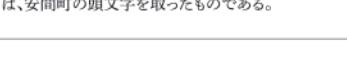
a 大唐破風重層造り
b 金太郎、七福神(十二支)巻竜、浜と松



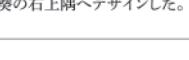
江

まち
飯
田
町

a 重層唐破風入母屋造り
b 大黒柱に力神を彫刻、白木彫



a 重層唐破風入母屋造り
b 大黒柱に力神を彫刻、白木彫



a 重層唐破風入母屋造り
b 大黒柱に力神を彫刻、白木彫



白地はまつりに初めて参加した時の初心を忘れることがないよう、赤の「江」は町民のまつりに対する熱い想いと強い結束、更なる発展を表す。

町名の由来は、昔ここに市が開かれていたためとする説が有力である。凧印は「市」の牡丹文字を基本に図案化し、丸文字は市野町三自治会の親睦の和を表したものである。

町内から案を募集した飯田町の凧印は、頭文字の「い」を全体に大きくし、「田」の字をバックデザインとして使っている。

大正初期までは花札の「あやめ」の絵凧であった。現在は浅田の「あ」を中心にして「田」を右上と左下に分けてデザインしたものである。



町名にちなんで、縁起の良い「龜」の字と、その背面の弓矢を「ヤ」と読ませ、矢の先端に「マ」を配して龜山町とした。



その昔、縁台将棋の盛んな時代があった。当時は多くの棋士を輩出し、周辺地域での対戦では負けを知らなかったとい伝えられており、将棋の駒がデザインとして用いられた。



参加当初は「HOC(浜松鉄商センター)」のマークを使用していたが、昭和53年から卸商団地の「卸」の一文字に変更された。



大正15年5月発行の浜松名物風案内という小冊子に記載されている印には「エ」の背景に右肩から左下にかけて2本のラインが描かれていたが、現在は上の印柄となっている。



佐鳴台地区には、浜松城主徳川家康の正室、篠山御前にまつわる大刀洗の池および赤宮神が存在していたなど、双方女性にまつわる史跡から、女性の喜怒哀楽を表現するという般若の面を使用している。



明治15年に鴨江小路の一部と大堀新地、白山下の3つの小字が一緒になり栄町となった。「サ」の字が鮮明に見えるよう艶地に白字とした。



元来、浜松城主より賜った鳥兜を風船としていたが、大空に高く舞い上がった際の見栄えを考慮し、シンプルなカタカナの印となつた。



浜松城下、外木戸、内木戸があった時に木戸町の頭文字の「き」である。



「可」の字を変体かなで書くと「の」となる。これが鴨江町の風印の原形になっていると思われる。



古くから水田が広がり今もその面影を残している。稻穂がたわわに実り波打つ田の様に力強い石(意志)を中心(上)に高く昇る町民の心意気を图案化。



尾張町の「尾」を太文字とし、片仮名の「ヲ」を亀甲に8字を埋め、風印としている。



町民と地元中学生に图案の公募を行い、他町の風印と識別しやすく、青空に映え、住民が親しみを持てる等の選考基準で選定した。



この地域が古戦場であったことから、佐乃一組が風揚げ会場に挑む心象を、矢立の中にある一本の矢羽根として町のシンボルにみたて、これを風印とした。



元魚町にある松尾神社の社紋の日鶴を肴町の風印としている。松尾神社は、最初浜松城内で守護神として祀られている。



赤は太陽、青は空を意味し、正方形の升目は小沢渡町の益々の発展を祈願する意味が込められた風印である。



風印は町名の頭文字「く」を海辺一带に群生する松の老樹で囲み、松の緑を取り入れ、文字を赤で表したものである。



昭和60年に「の組」から分離して独立参加したのを機に、町民から寄せられた图案を基に決定。町名の「鴨」と「北」をバランスよく組み合わせたデザインとなっている。



初子が五月の空に天まで揚がる風のように、たくましく成長してほしいという願いを込め、上島町の一字「上」を取って定めた。



大田家は私費を持って安間家の租税を代納した。これ聞いた今川氏は恩を受けた土地「恩地町」と命名。風印はこの町の沿革と地名の一字を示している。



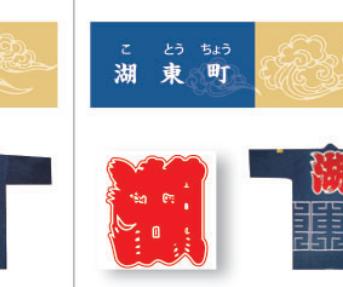
追分の風印は「旭日旗」から「兜」「を」「追」と変化してきた。風が揚がったとき見分けにくいという理由から、現在の印になった。



昔、津牟利神社には三つの神社が祀ってあり、三神野町と呼ばれていたのがなり、参野町と呼ばれるようになった。その頭文字の「參」を印とし、三本線は三つの神の意味を表している。



町名の由来は、昔、天竜川の瀬にあった頃一面の簾が生い茂っていたところから名付けられたと言われる。昔の簾ヶ瀬町の文字の簾を風印と決めた。



風印の「湖」は、浜名湖の湖と町名である湖東町の「湖」を使い、ひげ文字で表したものである。



初子が元気に育つようにということで「元」の字を真ん中にした。目の字を斜めにしたのは、子供たちが自分の目で、人生をしっかりと目立派な人間になるよう願いが込められている。



躾きおろし「しころ」に大銀形、鉄面を配し图案化した。端午の節句、尚武にちなんで、勇壮な風印として兜を風印としている。



以前は浜名郡可美村明神野と呼ばれた。「神様が創造し守護している有り難い土地」という伝承から、「神」を大きく風いっぱいに描いた。



浜松城内の鍛冶屋敷に住んでいた鍛冶師達を集団で東海道筋の町裏に移した所が鍛冶町となった。「か」は町名の頭文字。



大浦を中心とする一帯は平安時代には蒲が生い茂った湿地帯であった。風印には、風いっぱいに「蒲」の一字を大きく力強く描いている。



「さ」の字は三和町の頭文字で、斜めの三本線は、浜名郡飯田村といわれた時代の福増、小松方、西之郷の三つの字を表している。



町名の「さ」と「藤」を丸くあしらったもので、町民全員が丸く仲良く、そして町が発展するようにとの願いを込めたものだといわれている。



町名は、子安神社にちなみ名付けられたと思われており、その頭文字「子」の字を使用した。



鰯組の風や法被には、「鰯のぼり」のいわれにあやかり「鰯」の印が描かれている。町民全体で風揚げやお祝いの練りをして、初子のお祝いと町全体の繁榮・幸福の願いが込められている。



寺島の北側があるので、町名を「北寺島町」とし、風、提灯、手拭い等に「北」の字を使用するようになった。



上西町の氏神である富士神社の御神紋を示し、天狗の追い風に乗り、青空へ舞い揚がるようにとの願いが込められている。



天竜川の下流が幾筋にも分かれ、狭まっていた村里であったという説と、宇津志田金折が住んでいた土地から町名を命名したという説があり、その頭文字の「金」を取り入れたものである。



昔この地に大山寺(大仙寺)という真言宗の寺院があったことに由来。緑あふれた町を愛する気持ちから町名の大山を風印とした。



塩商人たちがこの町に住んでいたため塩町と呼ばれていたが、風印は志保町とて字としている。不祝儀の時は土の下に心を書くので、緑起をかつぎ、心を点の結びつきとして使用する。



当町の風印は変体仮名の「さ」のなめ上下に藤の花が入っていた。町名が分かれてからは、町の頭文字を変体仮名にしている。



町の由来は、町の中に幸山という山があったことや、幸を願う住民の気持ちを込めて、幸町とされた。風印は、町民が幸せとなり、また幸せな町づくりを願い表した。



浜松地方最古の社、蒲神明宮の神紋と町名の「神立」の文字をデザイン化したもので、町民になじみ深いものである。



町名の由来は、浄土宗の古刹西伝寺の寺号がそのまま地名になった。鳳印は、西伝寺の「せ」を平仮名で表したものである。



助信町は昭和11年にまつりに初参加して以来、町名をとって「助」の字を鳳印としている。



大正末期から昭和44年頃まで「イK川」と、大正時代には珍しい図柄であったが、掲がった時「K」が細く見にくいため、池川の「イ」とした。



蜆塚遺跡をもって代表される町。浜松市民のルーツがこの里において生活していたとされる。鳳印は、町名の「蜆」を取り入れたもの。



町内を流れる新川にかかる勝生橋が組名の由来。「生」の字を蝶のように図案化して大紋に使用。平成30年から富吉町のご厚意で中央屋台引き回しに参加。



昭和22年に寺島町有志で「テ組」として参加、現在に至る。赤地に白抜きの文字であったが、現在は白地に赤文字の2種類となっている。



誰にでも高丘の鳳だと識別でき、なかつ既に参加の先輩と同じ図柄(高・た・タ・絵)とならないよう苦労したデザインである。



俗説ではあるが、早出の地名の由来は、村人が勤勉で、朝早くから田畠に出て農作業にあたったためといわれている。鳳印は、町内より募集し、町名にふさわしい「早」となった。



頭陀寺城の松下加兵衛之綱に仕え、のちの太閤秀吉となる出世話にあやかって、ひょうたん印で初子の将来の幸運と出世を祈り、町民同士の諂ひらいの和の意を込めている。



下石田町の鳳印は、明治時代の駆けつけ組(消防隊)の印と、その当時興行をした一座の紋を取り入れたと菱を表している。



馬込川を挟んで東西両岸に町並みがある。三本線は馬込川を表し、町内の発展を情熱の赤の「十」の字で表現している。



遠江郡分福荷神社は、田中の氏神様として町内に鎮座している。この神印である光林寺(棒持ちの玉)の紋を図案化したものを使っている。



日本三大砂丘の中田島砂丘から「砂」の文字をひげ文字として、遠州灘の雄大なる波を表した鳳印。子供の成長が「天まで上がり」の願いに込められている。



白羽の矢を村人たちは宝物として保存した。以来、この地は白羽と呼ばれ、「白」の字を「羽」で抱きかかえてた鳳印が使われている。



外枠は太平洋の紺碧の色。内側の丸は参加組員の心意気を示している。篠原地区の篠を「し」とし、初子のお祝の象徴、鳳凰を表現し、「の」は、勾玉をデザインした。



大工町の鳳印は、昭和30年代半ばより、町名から取った字鳳である。それ以前は一つ巴の絵鳳だった。



参加当初は「す」であった鳳印も、明治中頃から新豊院のお稻荷さんの狐にあやかり、狐を愛嬌のある図柄にした。



三層桃山大唐破風造りがま仙人、二匹の童(夫と妻)の図柄を用いていた。その後「七転び八起き」の諺にあやかって「だらま」に変更した。



熊野神社の境内に四本松の由緒が刻まれた石碑が建っている。その松が四本松と呼ばれ、町名となった。鳳印は「四」をとった印とした。



町の豆菓子を専門に製造販売する評判堂という店の商標「おかめ印」。豆屋のおかめなら絵柄も派手で目立つであろうと登場した次第である。



住み良い町、住吉、これが町名の由来で、昭和15年に旧地区名、大柴原から町民の多数意見によって住吉町となつた。戦後復興間もない頃から鳳印に参加をし、町名の頭文字である「ス」を鳳印としたものである。



刀工志津三郎兼吉がこの地に土着したことから津浦がなまって新津の地名が付けられたといわれる。鳳印は町名の「新」の字を使用。



下飯田町は天竜川に隣接した地域にあるため、水を治めるものという発想から、龍の絵柄を鳳印としている。



昭和23年以降毎年参加している。最初の斜めの「市」の字は浜松市の鳳と間違えられる事もあり昭和38年に斜めに「中島」と書き、鳳印になった。



明治に消防組「富組」が発生、昭和8年に金馬籠5條が許され県下第一の消防組となった。富塚町鳳揚会はこの栄誉に因んで「富組」と呼び、鳳印の「富」の字は富塚町の富を意味している。



この地方きっとの古社松尾神社が氏神、御身体を守護する猿田彦命(天狗様)をもって他町の鳳を威圧せんと若衆の意氣衝天の心をよく表している。



武田勢が攻めてきた折、家康は驚き慌てて鯉の片方を食べ、片方の身はそばの池の中に捨てた。片身の鯉は出世して、佐鳴湖の主になったとい云われを圖案化した。



盛岡町の鳳絵は、最もシンプルな平仮名の「つ」がシンボルマークである。地色は清潔感のある白色。「つ」の文字は、町民の团结とまことにかける情熱を象徴する赤色で表示した。

鳳揚げ会場内芝生エリアは、浜松まつり参加者(正規の法被着用者)しか入ることはできません。

鳳揚げ会場では、鳳が落下する場合があります。上空にはご注意ください。



西菅原町は菅原道真の「菅」を鳳印として、鳳揚げに参加している。



西町の「に」を表している。「に」という字は簡単で形がよく、鳳に合う。空高く揚がった時、はっきり見えることから、「に」を鳳印とした。



鳳印は茄子町の「茄」の一文字を取り、鳳も法被も茄子紺の色で統一している。



外側に中島町の「中」を、内側を本町の「ほん」のデザインに決定し、それがほん組の鳳印になっている。



曳馬町の「曳」に右肩に草書体で本郷の「本」の字をあしらい、雄大さを表した。



戦前は「池」を小さく「川」を大きく朱色とし、上に昇つてもよく目立つようにした。戦後、「池」を大きくし、池川と目立つようにした。



鳳印は、町名の「初」と自治会区分の「北」を表している。



野口は曳馬野の入口にあたるとされている。鳳印は、野口町の頭文字を平仮名で表したものである。



頭文字「ニ」の文字が一番シンプルで、鳳が大空に高く舞い揚がった時、はっきり見えるという理由で決定した。



誰にも分かる文字で、町名を端的に表す「西」の一文字を鳳印に決めた。



名切、塚越の二つの字が合併し名塚町となった。二つの字の神社を合祀して奈津賀神社とした。神社の頭文字「奈」を鳳印としている。



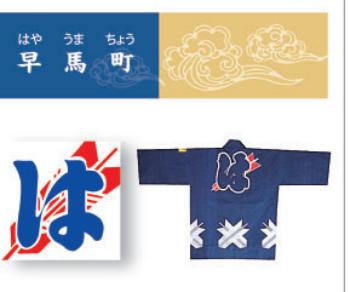
中と田の字がそれぞれ四方に、合わせて八方位に力強く広がり、町民の親睦、町内の活性化、青少年の健全育成、住みよい町づくりに寄与することへの願いが込められている。



三浦の小字は、現在自治会名にその名を残し、鳳印はその名前を伝えるものになっている。



菅原町の氏神様である天満宮に起因している。町民の繁栄と町内の安全を願い、天満宮の紋章である梅鉢にあやかり決定したといわれている。



鳳印は、大正時代まで「ひょっこ」とあったが、その後現在の「は」の字と矢の図柄に変更した。最初の浜松まつりから参加している。



その昔、三方原台地には萩の花が咲き乱れていたと言われ、このようないわれと、町名の「萩」の字を大紋に图案化したものである。



その昔、この地の北は沼地が広がっていて、東海道筋に出る道の妨げになっていたため、新しく橋を架けた事が町名の由来と言われている。



西ヶ崎は旧浜松市の最北に位置し、浜松を災害から守り、市民の幸福と豊作を祈願して、毘沙門天を絵柄にしている。



琉球の使者が琉球王妃の絵扇を江戸將軍家に献上する際、当地で病死し、その遺品であった絵扇を鳳印として使っている。



子供でもおぼえやすい平仮名で、52駅当時の仲間意識を表し、未来に向かって大きく羽ばたくよう、鳳いっぱいの文字とした。



「曳」と「宮」の二文字を鳳印の基本と考え、一番目立つ字の位置、また大空に揚がった時に自町の鳳が分かりやすいようにとデザインした。



田町、北田町と共に、田町の稻荷神社の氏子であつたため、稻荷神社の宝珠と東田町の「東」を組み合わせたものである。



真ん中に赤い薔薇の花、斜めに緑の2本線で原島と表現している。



町名の由来は、当町は旅籠の町であったから、当然のことである。鳳印は、町の定紋であった桔梗を用いている。



飛可羅寿(ひからす)の絵鳳は名残町の鳳として昔から揚げられてきた伝統の鳳。これは神の使いのからすなのだという話が絵柄となっている。



桜の木が多い町であることから、神明宮の境内の桜の花びらを图案化した。花の真ん中に池川町の池を抱えた絵鳳にした。



菱形に「成」の字。「小」の字を紋章化した家紋「小の字菱」と思われる。



種々の事情により町内が二つに分かれ、別々の鳳印で一枚の鳳を描いていたが、統一して分かりやすい中山町の頭文字「ナ」とした。



地名を表す、黄色は圓をデザインし、大きな輪の中に和をもつて一丸となり赤く燃える百のエネルギーによって里から空高くという願いを图案化。



三方原合戦で破れた徳川軍は武田軍に追われ、中沢町常楽寺の仏像を持って川に沈め橋に使い派松城に戻った。のちに徳川家康がこの地を阿弥陀と名付けたといわれており、この名を使用している。



半田山にある半田団地自治会の「半田」を图案化した。



明治時代から八幡町の鳳印は提灯にある親子の鳩での字を表し、鳩八と言われていた。昭和初期、太陽に向かって羽ばたく鳳印となった。



空に揚がってしまえば簡単ですっきりした方が良いということ、白地に赤の「布」印に決まった。



赤と青地に町名を白抜きした。赤は町民の情熱、青は雄大な遠州灘と天竜川の下で住み良い町づくりを願う気持ちが込められている。



「南」は自治会名、三本の斜線は馬込川で、瓜内、法枝、田尻の三町の住民が協調してふるさとをつくりたいという願望を象徴したものとなっている。



鳳印は名残の「名」の文字をデザイン化したもので、当初「ハイカラ」、「落ち着きがある」と好評であった。



広沢という名は、曹洞宗の僧、華藏院暎が建てた寺を、広沢山普濟寺としたことに起源があると思われる。鳳印は、広沢町の「ひ」を使用している。



岡柄の丸に五瓜に唐花は、当町内の氏神様八坂神社の紋であり、これに「曳」の字をあしらったものである。



町火消し「いろは」の一番目の文字で非常に活気があふれているということで、「い」が受け入れられた。



町名の初生町の「初」を採用している。「初」からイメージされる言葉は初子、初鳳と、浜松まつりの起源そのものである。

鳳揚げ会場内芝生エリアは、浜松まつり参加者（正規の法被着用者）しか入ることはできません。

※屋台の種類									
屋台の種類					彫刻の種類				
みしまちょう 三島町									
a軒揚二重屋根唐破風 b大山祇神、木花咲耶姫、瓊杵尊、昇竜等	b母屋造り	a加藤清正の虎退治	b唐破風軒挿入母屋造り						
三島町の氏神である浜松神社の祭典時に着用する法被より「三」を引用し、鳳印としている。	鳳印は町名が一目で分かるようなものがよいと思われ、丸塚町の頭文字の「丸」とした。この「丸」という字は、円満の象徴であり親しみやすく空高く揚がってもよく見える。	町民に鳳印を一般募集した結果、本郷町の「本」の字を使った図柄が採用された。	馬込川の中流にあり、渡し船の仕事をしてきた人たちが居住していた。その由来にちなんで船越町といわれ、鳳印も「船」を取り入れた。						
みやたけちょう 宮竹町									
a重層入母屋軒唐破風 b五仙人、黄石公、張良	b造り	a唐破風 b天女、ぼたん	b名付けられた。この町名の「ふ」を取って、法被や鳳の印に用いている。						
藩神明宮の屯倉(みやけ)があり、いたる所に竹林があつたため宮竹と称する説がある。鳳印は頭文字の「宮」を中心に、「竹」をバックデザインとした。	一字で天高く揚がった時見やすい「み」とした。	文化施設が多いことから、住民の投票で文丘(ふみおか)と名付けられた。この町名の「ふ」を取って、法被や鳳の印に用いている。							
むこうじゅくちょう 向宿町									
a桃山式大唐破風 b飛竜、竜、恵比須腰膨 荒波に千鳥24羽	b	a	b	b					
地名の由来は、向州と呼ばれていたためとか、川を挟んで浜松宿と向かい合っているためなどと言われている。鳳印は向宿の「む」の字。									
もと元魚町									
a唐破風入母屋造り	b重層入母屋軒唐破風 b三方原合戦の両英傑	b	a	b					
もともと魚屋が多く住んでいた町であったからといわれている。鳳印は、大正の頃は、火消しの櫓の中に「も」を入れた図を使用していたが、現在のデザインに変更した。	町名の三方原の「ミ」と、南の「ミ」を組み合わせたデザインの「ミ、ミ」を鳳印とした。誰にも分かりやすく、組み合わせにより住民の結束の一助になればといふ気持ちがこもっている。	鳳印は、「本馬込町」時代からの氏神白山神社の社紋「右三ツ巴」。区画整理に伴う最少世帯数7という苦境を乗りきった誇りをもってまつりに臨む。	神出組は高町組の指導を受け育った。そこで「おかめ組」にあやかり、ひょっこり(火男)に決められた。						
もと元城町									
a城型入母屋造り b浜松城をモデルにした波と浜干	b	a総ヒノキ白木大唐破風 重層造り	b	b					
昔、元城町は浜松城の一部であり、江戸幕府崩壊後、鳳発祥の由来が風化するのを惜しみ、日の丸の鉢巻、袖印に身を包み日の丸の大鳳を元城の合印にするようになったといわれている。	三組町の中心にある秋葉神社が鳳印の元である。秋葉神社は天狗の山として有名であり、その天狗の団扇もみじの葉が、神社旗の印になっており、神社のお許しをいただき、もみじを鳳印とした。	松城町はこれまで多くの鳳印が使われおり、十数種類もの图案の記録が残っている。現在の鳳印に定まったのは戦後の再開墾からで、遠くに揚がっていても判別しやす以便に工夫されている。	細島町で「細」という字をとったもので、これは町内から鳳印の募集を行い、決定したものである。						
わごうちょうせいわ 和合町西和									
a唐破風軒挿入母屋造り	b	a	b	b					
御所車の輪は「和」を、外輪を支えるスポークは「合」を表す。「西」の字を組み合わせ「西和の輪を皆で支え合い前進して行こう」という意味を込めた。	五社神社の紋は藤である。この神社のお膝元であり、氏子が大勢いた連尺町は、「連」の字と「藤」の絵を鳳印にした。	住民投票で決定した町名のPRも兼ねて、町名の「山手」とし、团结を表す意味で「手」の字を赤色とした。							
みやたけちょう 宮竹町									
a重層入母屋軒唐破風 b五仙人、黄石公、張良	b	a	b	b					
藩神明宮の屯倉(みやけ)があり、いたる所に竹林があつたため宮竹と称する説がある。鳳印は頭文字の「宮」を中心に、「竹」をバックデザインとした。	一字で天高く揚がった時見やすい「み」とした。	文化施設が多いことから、住民の投票で文丘(ふみおか)と名付けられた。この町名の「ふ」を取って、法被や鳳の印に用いている。							
わだちょう 和田町									
a重層入母屋軒唐破風 b五仙人、黄石公、張良	b	a	b	b					
和田町の「わ」の図柄4点を町民に回覧し、その中から選ばれた鳳印を使っている。	平成3年5月浜松市合併を機に、平成9年より鳳揚げに参加。鳳印は若林町の頭文字をとって、「若」とした。	デザイン上形が整っていること、鳳が高く揚がった時にも識別しやすい単純なデザインであること、ということから「よ」と選ばれた。							
わかばやしちょう 若林町									
a重層入母屋軒唐破風 b童、松、雁	b	a	b	b					
わかばやしちょう 若林町北									
a一層唐破風 b童、松、雁	b	a	b	b					
渡瀬町の頭文字の「渡」一文字をデザインした鳳印である。	真中の赤丸は若林の発展を願う太陽を表し、北はいつも若林を支えていくという思いを込めている。	米津町の「米」をデザイン化した鳳印で、古くから地元の法被に使われていた。							
わたせちょう 渡瀬町									
a一層唐破風 b童、松、雁	b	a	b	b					
よねづちょう 米津町									
a舟形二層唐破風 b松引き五郎、昇り童と下り童、七福神	b	a	b	b					
やくしまじょう 薬師町									
a	b	a	b	b					
この地名は、和地村の入会地、山であったことから「和地の山」と言われたことに起因する。鳳印は、町名の頭文字「和」を使っていている。	浜松まつりは5月実施、この日は5月5日、桜は花弁が5枚。これと町名の和合を輪五(わご)ともじって、五輪(ごりん)の数を基本としている。輪の重なりは、町民全體がお互いに手を組み合いで、住みよい町づくりが出来ますようにと願いが込められている。	昭和28年頃までは「龍」の字は白抜きであった。28年以降、「龍」の字を赤一色に定め、現在に至っている。							
わじやまちょう 和地山									
a入母屋軒唐破風 b不老長寿を約束する仙人達である八仙	b	a	b	b					
りゅうぜんじちょう 龍禪寺町									
a重層唐破風 b飛竜、大黒えびす、川中島合戦	b	a	b	b					
やすまつちょう 安松町									
a	b	a	b	b					
やまとしやまちょう 山下町									
a重層唐破風軒挿入母屋造り b七福神、鹿、滝昇り鯉、腰膨十二支	b	a	b	b					
浜松市部長会					<img alt="Wagon				